

第5回歴史懇話会

話し手：大串康隆（元放影研長崎事務局次長）

聞き手：金岡里充（放影研事務局長崎次長）

日時：2015年12月17日（木）15：00-16：10

場所：放影研長崎第4会議室および広島研究所講堂（TV会議）

文中では敬称略

金岡：本日の講師は、元長崎研究所事務局次長の大串康隆さんです。大串さんは、1959年7月にABCC長崎研究所の内科に技術員として採用され、日本人の貧血を調査するプロジェクトに携わられました。その後、臨床検査科で主に血液を専門に33年間、検査業務に従事されました。1993年、54歳の時に技術職から事務職に職種変更となり、検査技師長から臨床渉外課長へ異動されました。翌年には臨床庶務課長、臨床研究部次長を経て、1998年に長崎事務局次長に就任され、1999年の12月末に定年を迎えられています。それでは最初に、どのような経緯で入所されたかをお聞かせいただけますか。

大串：入所のきっかけは、米国から長崎研究所に血液学者のDr. ブレイスデル (Dr. Blaisdell) が赴任してきたことです。その目的は、日本人の貧血の調査でした。当時は、プロジェクトを立ち上げる時に、研究者が秘書や技術員を採用していたようです。私は高校卒業後、一旦市内の企業に就職していましたが、新聞広告でABCCが技術員を募集していることを知りました。その時の募集内容は大学卒業が条件だったため、次回募集があれば連絡をお願いし、事務局に履歴書を預けて帰ったことを覚えています。4ヶ月後、追加募集があり今回は高卒も採用するので試験を受けました。試験はペーパー試験ではなく、Dr. ブレイスデルの口頭試問でした。当時、何人が受験したのかは不明でしたが、採用が決定し、配属された内科で、「日本人の貧血調査」に携わることになりました。当時、日本人の貧血は鉄欠乏性貧血が一番多かったと記憶しています。

金岡：ABCCについては、よくご存知でしたか。

大串：当時、ABCCの建物は桜馬場にあって、私の家から歩いて4、5分の距離でした。ABCCの車庫が広場だったので、子供の頃にそこで遊んでいた記憶があります。

金岡：ABCCという米国の職場に就職することに抵抗はなかったですか。

大串：それはありました。私のおじが、知り合いのABCCの職員に就職先としてどうだろうかと相談したところ、「ABCCは継続年数に疑問があるので、やめたほうが良い」と助言されました。

金岡：ABCCに転職された理由は、給料や労働条件に有利な面があったのですか。

大串：給料は以前に勤めていた場所と同じくらいでしたが、土日休みなのが魅力でした。

金岡：私が放影研に就職した時代は、日本では完全週休二日制は一般的ではなく、隔週で土日休みが始まったくらいなので、大串さんの時代には他ではなかったのではないで

すか。

大串：一般的な休みは日曜日くらいでした。

金岡：ABCCは、日本の祝祭日は休みではなく、米国の独立記念日などが休日だったと聞いたことがあるのですがそれは事実ですか。

大串：記憶が定かではないのですが、米国の休日に則していた時期が何年かありました。

金岡：先ほど入所試験はDr. ブレイスデルの口頭試問だったとお聞きしましたが、英語で質問されたのですか。

大串：Dr. ブレイスデルは日本に赴任したばかりなので、日本語が堪能ではありませんでした。通訳を介して日本語で質問を受けました。

金岡：質問の内容は、覚えていらっしゃいますか。

大串：酸と塩基のことを質問されたと思いますが、具体的な内容は忘れしました。

金岡：米国人アレルギーは、ありませんでしたか。

大串：Dr. ブレイスデルはアジア系に見え、西洋人とは思えませんでした。

金岡：配属された内科の血液室スタッフは、どのようなメンバーでしたか。

大串：日本人のスタッフだけしか記憶にありません。

金岡：技師や看護師はどれくらい居ましたか。

大串：技師は、私の後に2名採用されて4名になりました。保健婦はコンタクトセクションから血液室のスタッフに配属されました。

金岡：大串さんの時代は、採用されてから検査の技術を習得されたそうですね。

大串：Dr. ブレイスデルが米国式の検査法を1冊にまとめた冊子を教科書として、勉強しました。

金岡：血液室での業務内容を教えてください。

大串：現在の検査方法と検査科目はあまり変わらないと思います。

金岡：当時の検査方法を覚えていますか。

大串：血液検査のヘマトクリット法（注：一定量の血液中に含まれる赤血球の割合を調べる検査法）は、私が血液室に異動した後に二転三転しました。最初は血沈管で検査していましたが、最後はごく微量の血液で検査が可能となり、技術が3段階に分けて進歩しました。

金岡：貧血の調査なのでヘモグロビンを測定されたと思うのですが、検査方法を教えてください。

大串：ABCCには日本で唯一、コールマンの比色計が導入され、シアンメトヘモグロビン法（注：赤血球を試薬で変色させ、吸光度または透過率を測定し、別に標準液で作成した標準検量曲線からヘモグロビン量を読み取る検査方法）を使っていました。当時の日本では、目視で色の濃さの測定を行うザーリー法の検査が一般的でした。そのため、長崎の他の病院は、ABCCの機器や試薬を欲しがっていました。

金岡：他の病院との情報交換の場所がありましたか。

大串：勉強会をやっていました。各病院から検査技師が ABCC に集まり、ザーリー法とシア
ンメトヘモグロビン法との相関変化の検討会などが行なわれていました。

金岡：貧血の調査を行うためには採血をしなければならないと思うのですが、当時の採血
方法はどのようにされていきましたか。

大串：保健婦が訪問予定を立て、ABCC のドライバーが運転するジ
ープで、保健婦と検査技師がチームを組み、対象者の家を一
軒一軒訪問しました。採血は検査技師が行いました。

(※写真：ジープ)



金岡：技師が採血していたというのは驚きですね。大串さんも採
血を行われたのですか。

大串：はい。

金岡：採血は練習されましたか。

大串：検査技師同士で練習しました。

金岡：採血したものは、どのように持ち帰っていましたか。

大串：ヘパリン処理をしたガラスチューブで 2、3cc 持ち帰りました。

金岡：採取した血液は冷やしていましたか。

大串：常温でした。午前中に対象者の家を 4、5 軒訪問して、すぐに帰って処理していまし
た。

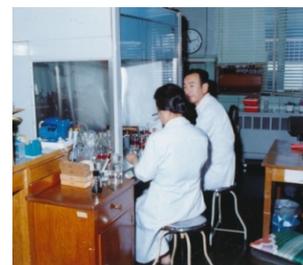
金岡：当時は道路事情も今よりよくなかったと思いますが、遠くまで歩いて訪問されたこ
ともありましたか。

大串：ありました。遠くまで行った記憶は、飽ノ浦の三菱重工の玄関口で下車し、徒歩で
三菱重工構内を通ること、あるいは山越えし、木鉢や小瀬戸などの目的地へ行くこと
もありました。

金岡：当時、注射器等の準備はどのようにされていたのですか。

大串：注射器等の滅菌には大型のオートクレーブ（注：内部を高
圧力にすることが可能な耐圧性の滅菌装置）がありまし
た。準備室があり、注射器の針を砥石で研いでいました。採
血道具は全てそこで用意していました。

(※写真：検査室の大串氏)



金岡：大串さんが ABCC に入られて以降、技師は衛生検査技師法な
どができ、国家試験が設けられたと思います。国家試験はいつ頃受けられましたか。

大串：国家試験制度は、私の入所後すぐに第 1 回目が行われたようです。ABCC の 2、3 名が
合格したので、試験制度のことを知りました。翌年 2 回目が行われるため、技師の受
験が推奨されました。

金岡：勉強はどのようにされましたか。また、試験科目を教えてください。

大串：試験科目は今とだいたい同じだったと思います。血液、生化学、病理などがありま

した。一般的な試験だったと思います。付け焼刃で試験を受けました。受験するには2年間の実務経験が必要であり、私は経験年数が少し足りませんでした。首尾よく受験することができました。当時は技師が少なかったのも、なんらかの配慮があったのではないかと思います。

金岡：血液のことは良くご存知だと思いますが、その他の生化学、細菌などの分野はどのように勉強されましたか。

大串：血液や生化学の雑誌はありましたが、細菌学はありませんでした。ABCCの近くの県衛生研究所に知人がいたので、習いに行きました。それほど難しくなかったのも、なんとか習得することができました。

金岡：ABCCの技師は、一回目と二回目の国家試験でほとんど資格を取られたのですね。

大串：そうです。

金岡：臨床検査技師の資格を取られて、ABCCの中では職種の名称は変わりましたか。

大串：ABCCの中ではありませんでしたが、他の病院の医師からは「ラボランチン」と呼ばれたこともありました。言葉の意味が分からず、差別的な言葉だと感じました。

(注：「ラボランチン」は、ドイツ語で研究助手を意味する。ABCCでは検査技師を「テクニシャン」と呼んでいた。)

金岡：Dr. ブレイスデルは何年くらいABCCにおられたのですか。

大串：2年が任期だったと思います。彼が米国に帰る時、私たちは臨床検査科へ異動となりました。

金岡：臨床検査科では、どのような調査をされたのですか。

大串：血液が専門でしたので、白血病の調査を行いました。

金岡：白血病の調査はどのようにされましたか。

大串：各病院に入院している患者が、白血病であるようだという情報がABCCに送られてきました。

金岡：ABCCへの連絡は義務付けられていたのですか。

大串：長崎の医師たちは、大学の人事でABCCに派遣されていました。ABCCに継続して勤務している医師もいましたが、大学からの派遣医師が多い状況でした。そのため、大学とABCCの医師の連絡が密で、病院にもなんらかのコンネクションがあったと思います。白血病の情報が来ると医師と技師が骨髄穿刺に出かけました。骨髄穿刺は医師が行い、スライドグラスに血液を伸ばす作業などを技師が行いました。

金岡：スライドグラスに血液を伸ばす作業は私も病院で行った経験がありますが、細胞数が多いので、押すと固いため難しいと感じました。

大串：骨髄の中には脂肪分が多いので、ガラスで弾かれて作業が難しいこともありましたが、一般的には大丈夫でした。しかし脂肪を取り除くため、スライドガラスの洗浄が問題でした。アルコールやクロム硫酸の中に浸すなどの処理をしていました。

金岡：検査科では、各担当のローテーションがありましたか。

大串：時代が進むと他の分野の勉強が必要となり、ローテーションを自主的に行うようになりました。年単位で細菌、生化学など担当を変りました。生化学を担当している時、米国人のニューリンという女性が、長崎の検査科に赴任されました。彼女が血清鉄を測定するように指示を出したのですが、当時の長崎では血清鉄の測定は行われていませんでした。血清鉄検査を立ち上げるために4、5ページの英文の検査法が提示されましたが、私は英語がわかりませんでした。折よく知り合いに三菱電機の英語の先生がいましたので、その方と私で英文の検査法を和訳することにしました。その作業に3ヶ月ほどを要し、なんとか立ち上げることができました。それが、私のABCC時代の一番の苦労話です。

金岡：研究に関して、広島との情報交換はありましたか。

大串：常に電話で連絡を取り合っていたようです。出張をして来ることもあったし、私が広島へ出張したこともありました。Dr. ブレイズデルが米国に帰る時、検査技師を1名ずつ広島に2週間派遣しました。勉強という名目でしたが、後で考えると広島の研究室を見学してきなさいという親心的な考えだったようです。広島では顕微鏡を2、3日覗き、あとは他の施設を見学しました。一週間の出張は思い出深きものとなりました。

金岡：検査技師の話をメインでお聞きしようと思いましたが、54歳で技師から事務職に変わられ、臨床渉外課の課長から最後は事務局次長まで勤められましたが、技術職から事務職に変わることに抵抗はありませんでしたか。

大串：ありました。技術職から事務職に変わるのには寝耳に水でした。何も知らない人間が来るのですから、異動先の臨床渉外課はさぞびっくりしたと思いますが、課の皆さんには大変協力していただきました。

金岡：技術職の考え方と事務職の考え方の違いを感じたことはありませんでしたか。

大串：技術職は方法論と書類がしっかりしているので迷いませんでしたが、事務職は事象をどのようにその場で判断するかが大変に思えました。例えば、受付は対象者が来られた時、どのように対応するか判断が難しいと感じる時もありました。

金岡：その辺は、ご本人の裁量に任されたということですね。

大串：そうです。

金岡：臨床渉外課への配置転換は同じ臨床研究部でしたが、事務局への配置転換はさらにハードルが高くありませんでしたか。

大串：あの時は、正直困りました。事務局には他に人材がいましたので、てっきりその方がやって頂くものだと思っていましたから。異動当初は、自分は手伝うような気持ちで職務につき、その後広島の方々の協力もあり、色々な行事等も滞りなく無事努めあげることができました。

金岡：ABCC時代は、大串さんの世代の方のお話を聞きますと、クリスマスパーティーが開催されたり、社交ダンスを楽しむ人もいたとのことですが、ABCC時代には何かイベント的な思い出はありますか。

大串：年末パーティーを2回ほど経験しました。昼間、キャバレーを借り切ってパーティーをしたこともありました。

金岡：長崎のABCCに常駐していた米国人は、どちらにお住まいでしたか。また、そこへ遊びに行かれたことはありますか。

大串：ABCCのすぐ裏手には石橋群で有名な中島川が流れており、そこから100メートルほど細い坂道を登ると、山の中腹に米国人用の宿舎がありました。一般的には、松田邸と呼ばれていました。玄関までは行ったことはありますが、中まで入ったことはありませんでした。



(※写真：松田邸 1988年1月撮影)

金岡：折角の機会ですので、職員の皆さんから大串さんに聞いてみたいことはありませんか。

広島：大串さんは桜馬場から歩いて4、5分のところにお住まいだったそうですが、原爆で家が壊れたようなことはありませんでしたか。

大串：私の自宅は爆心地から3.6キロメートルとされていますが、倒壊することはありませんでした。ただ、爆風のため建具の障子や襖は吹き飛ばされ、どこに飛んで行ったのかはわかりませんでした。また家が捻じれ傾向いてしまい、鴨居や敷居に隙間ができたため、数年経っても、障子は傾いたまま開け閉めをしていました。

長崎：大串さんが入所された頃は、試薬は自前で作られていたが多かったと思いますが、試薬類は米国から輸送されたものが多かったのですか。

大串：染色試薬はドイツ製を米国経由で入手できましたが、試薬は日本製でした。器材は不足していましたので、洗って使用していました。しかし、大学などの資材不足はもっと深刻で、大学に見学に行くと、暗いところで一人検査していた人を見かけました。それに比べると、ABCCは検査機器や試薬は豊富に揃っていると感じました。

金岡：成人T細胞白血病の研究でATLA関係の検査は、高度なことをしていたと聞きましたが、大学と共同研究だったのですか。

大串：ATLAの検査は地域差があり、長崎県は陽性が多く広島では少ない傾向がありました。検査は抗原抗体法といい、陽性細胞を固定してその上に対象者の血清を乗せ発色具合を見て、その強度により、マイナスからプラス4ぐらいの判定をしていました。

金岡：抗原はABCCで陽性細胞を培養していたのですか。

大串：それは長崎大学が保有しており、その都度分けてもらっていました。しかしたびたびもらうようになると、管理している人の機嫌悪くなって行きました。ABCCの研究員に細胞が手に入らなくなるかもしれないと相談し、対価に見合う誠意を示すことで、その後も継続して細胞を分けてもらうことができました。

金岡：今日は長時間に渡り貴重な話を伺え、大変参考になりました。今後とも、我々をご指導いただければと思います。本日はありがとうございました。

大串：ありがとうございました。



大串さん



左から 大串さん、金岡事務局長崎次長(懇話会当時)

以上